

春はるをを探たづねる

戴たい

益えき

尽じん日じつ春はるをを尋たづねてねて春はるをを見みず

杖じょう藜れい踏とう破はすは幾いく重ちゆうのの雲くも

帰き来らい試しみみ梅ばい梢しやうをを把とりてりて看みればれば

春はるはは枝し頭とうにに在あるる已すでにに十じゅう分ぶん

【作者】

戴益 (生没年不詳) 作者は宋の時代(九六〇〜一二七五)の人というだけで生卒年その他不詳。この一首によつて名が伝えられている。

【語釈】

* 盡 日…朝から晩まで 終日 * 杖 藜…あかざの杖をつくこと

【通釈】

一日中、春を探ね歩いたが春らしい風景を見る事ができない。杖をつき山野(さんや)の雲を踏みわけたが徒労におわった。家に帰って何気なしに梅の枝をとつてみると、いつのまにか蕾もふくらみ春の訪れをみせている。